

喜界島・奄美大島から薩摩・大隅地方の中世遺跡の様相

The Aspects of Medieval Remains in Kikajima Island, Amami-Ōshima Island, and Satsuma-Ōsumi Area

岩元康成

IWAMOTO Yasunari

はじめに

①喜界島・奄美大島の中世遺跡・貿易陶磁器研究史

②課題と検討方法

③喜界島・奄美大島と薩摩・大隅地方の遺跡の状況

④比較

まとめと課題

【論文要旨】

本稿では喜界島・奄美大島と薩摩・大隅地方の中世遺跡について両地域で出土した建物跡・土坑墓などの遺構と中国陶磁器などの遺物を比較し、11世紀後半から16世紀を5段階に分けて関連を検討した。

11世紀後半～12世紀前半には喜界島城久遺跡群において焼骨再埋葬のように中世日本にない要素がある一方で四面庇付掘立柱建物跡・建物群内にある土坑墓など薩摩・大隅地方と類似する点が認められ、これまで文献史学から指摘されていた喜界島で九州の在地領主層、宋商人が南島での交易に関与したことが遺跡からもうかがえる。

しかし12世紀後半になると喜界島・奄美大島の陸上の遺跡で中国陶磁器が減少する。この時期に南島との交易に関連した阿多忠景の平氏から追討や源頼朝により貴海島への征討などが起こっており、このような事件の影響が中国陶磁器の流通に反映されていることが考えられる。

13世紀以降15世紀にかけて両地域間では、遺構・遺物の差異が目立つ状況にある。奄美大島の赤木名城は九州戦国期の山城と類似が指摘されているが、15世紀に九州の築城技術が伝えられたとは考えにくく、近世に整備された可能性がある。

15世紀に喜界島・奄美大島は琉球と対立し敗れている。喜界島と奄美大島笠利地区の15世紀の遺跡が存続せず、16世紀の遺物がほとんど出土していない。集落の移動があったことが想定されるが、そこに琉球の支配がどのように関係しているのかは今後の検討課題である。

【キーワード】 喜界島・奄美大島, 建物跡, 中国陶磁器, 土坑墓

はじめに

2000年代以降喜界島の城久遺跡群の発掘調査が進展し、古代中世の奄美地方について考古学だけではなく、文献史学等多方面で見直されることとなった。古代では大宰府との関連、グスク時代初期の状況について沖縄の考古学研究者が発掘調査成果に言及した〔池田編 2008 など〕。一方で行政区画が同じ鹿児島県内の考古学会、研究者が喜界島、城久遺跡群に言及することは池畑耕一〔池畑 2008〕を除き少ない状況であった。また前後して城久遺跡群以外にも喜界島・奄美大島で調査が進み九州との関連も指摘されたが、薩摩・大隅地方からみた研究はなかった。近年薩摩・大隅地方でも発掘調査の進展とともに指標となる遺跡も明らかになった。そこで本稿では奄美地方と薩摩・大隅地方の掘立柱建物跡を中心とした遺構と貿易陶磁器を中心とした遺物の比較を行い、中世における両地域の関連を検討する。

①……………喜界島・奄美大島の中世遺跡・貿易陶磁器研究史

喜界島・奄美大島の中世遺跡の考古学的な調査研究が本格化したのは1970～1980年代になる。鹿児島県教育委員会が行った中世城館の調査で喜界島・奄美大島の城跡が報告されている〔鹿児島県教委 1987〕。また沖縄県立博物館での特別展「グスク」の中で奄美地方の城跡が報告〔沖縄県立博物館 1985〕されているが、発掘調査成果をもとにした年代の検討は行われていない。

1990年代になると奄美大島、笠利町教育委員会による用安湊城跡〔笠利町教委 1993〕・万屋城跡〔笠利町教委 1997〕などの中世遺跡の発掘調査、名瀬市教育委員会・琉球大学により名瀬市内の山の尾根筋に残る平坦面や土塁、堀などを有する城郭遺跡が調査され〔名瀬市教委 2001〕、奄美大島の城郭遺跡の問題点が把握された〔高梨 1997〕。陸上の遺跡以外に注目された成果に宇検村倉木崎海底遺跡〔宇検村教委 1999〕がある。この遺跡では中国陶磁器が海底で発見され、中国から南西諸島を経由し九州へ貿易船が往来するルートの可能性が指摘された〔金沢 1999〕。喜界島ではオン畑遺跡・巻畑B・C遺跡の調査報告書で喜界島では奄美地方の在地の土器である兼久式土器がみられないなど古代中世にかけて出土遺物に外来の要素が強いことが指摘されている〔喜界町教委 1993〕。南西諸島の貿易陶磁器の流通について亀井明徳が検討する中で奄美地方から出土した陶磁器を検討し、中世前半・後半での流通ルートの変遷を指摘している〔亀井 1993〕。

2000年代になると喜界島城久遺跡群の調査が進展し、古代から中世にかけて遺物が大量に出土し、多数の掘立柱建物跡があることが判明した。古代においては考古学から初期貿易陶磁や九州産の土器が出土し、大宰府ないしは国府官人層が造営主体と想定される〔中島 2008〕など大宰府との関連が指摘されている。文献史学からは10世紀に大宰府から南蛮捕進命令を受ける「喜駕島」が城久遺跡群のある喜界島であった可能性が高く〔永山 2007〕、檳榔や夜光貝、赤木といった南島の産物を得るための拠点であったと考えられている〔鈴木 2008・田中 2008〕。発掘調査報告書刊行が続く中シンポジウム等が開催され、鹿児島県内外から考古学・文献史学と様々な研究者が調査成果の検討を行った〔池田編 2008〕。土坑墓について狭川真一が検討している。城久遺跡群でみられる焼骨再埋葬と定義し中世日本にみられず、この段階にだけ出現する墓制で、その系譜はわかっていない〔狭

川 2008〕。その後南西諸島の墓制について瀬戸哲也が検討し日本の中世墓⁽¹⁾の変遷とはほとんど一致しないが 12 世紀に現れる土坑墓など大きな流れや画期は無関係ではないと評価している。また城久遺跡群の白磁・カムイヤキの埋納は他地域及び後代にみられないこと、万屋城跡・前畑遺跡の一つの土坑に合葬された事例は南西諸島の他の地域にみられないことを指摘している〔瀬戸 2011〕。中島恒次郎は掘立柱建物跡を中心とした遺構⁽²⁾と出土遺物を分析し、当時報告書が刊行されていた山田半田・山田中西遺跡と太宰府時期区分 C 期に位置づけられる九州の遺跡を比較し、城久遺跡群の掘立柱建物跡は建物占有面積から大規模なものと小規模なものに二極化しているが後者に遍在し、建物配置は官衙的ではなく中世期の居館的と比較すべきとしている。土坑墓は建物群内に位置するため屋敷墓的な印象を受けるが明確に屋敷墓とは評価していない〔中島 2008・2010〕。また掘立柱建物では仲宗根求が沖縄のグスク時代開始期の掘立柱建物跡を検討する中で沖縄本島の遺跡と奄美大島旧笠利町の下山田Ⅲ遺跡の掘立柱建物跡を検討し、母屋（主屋）に付随する建物は 4 本柱のみで構成される特徴があると指摘している〔仲宗根 2004〕。城久遺跡群の掘立柱建物・土坑墓・出土遺物は最終的に総括報告書で分析が行われ傾向が示され、建物群にはⅠ（太宰府時期区分 A・B 期）～Ⅱ期（太宰府時期区分 C 期）に溝状遺構など空間的仕切りがほとんどないことが指摘されている〔喜界町教委 2015a〕。

奄美大島では奄美市笠利の赤木名城跡が調査され本土でみられる山城と類似することがわかり〔笠利町教委 2003〕、2009 年に国指定史跡となった。ただし赤木名城跡の評価については九州の戦国期の山城と遜色ないという評価〔鶴嶋 2008〕に対して 12 世紀に成立し沖縄のグスクへ影響を与えたという評価〔知念 2008〕があり矛盾する状況にある。

このように発掘調査が進展する中、新里亮人が南西諸島の中世前半の陶磁器流通を分析している。新里は 11 世紀後半から 14 世紀を 3 時期に区分し、1 期に白磁碗Ⅳ類などが九州から流通していたものが、3 期に白磁碗ビロースタイルが宮古八重山地方から流通することを指摘した〔新里 2015〕。また具志堅亮によって奄美地方出土の中国陶磁器の集成が行われ、12 世紀前半まで喜界島を中心に遺物量が増加→12 世紀後半に減少→13 世紀は徳之島のみ遺物量が増加し→14 世紀以降全域で遺物量が増加するという傾向が示されている〔具志堅 2014〕。

②……………課題と検討方法

中国陶磁器は亀井・新里・具志堅による研究や集成があり、流通ルートの変遷が指摘されている。しかし赤木名城跡など遺跡の年代についての資料の分析と評価について不十分な点がある。また掘立柱建物跡、土坑墓、城郭遺跡の土塁や堀と個別に沖縄や九州と比較されているが、九州で最も近い薩摩・大隅地方の調査成果との検討はほとんど行われていない。

以上の点について 11 世紀後半から 16 世紀にかけての喜界島・奄美大島と薩摩・大隅地方の遺跡の比較を行う。時期区分は今回の琉球帝国陶磁器調査の時期区分〔池谷・小野ほか 2012〕を用い①Ⅰ期（大宰府・山本 C 期）、②Ⅱ期（大宰府・山本 D 期）、③Ⅲ期（大宰府・山本 E～G 期）、④Ⅳ a・Ⅳ b 期（大宰府・山本 H 期）、⑤Ⅴ・Ⅵ期（大宰府・山本 I～J 期）の各時期に分けて検討する。なおこの時期区分は九州・奄美地方で一般的に使用されている大宰府における陶磁器時期区分〔太宰

府市教委2000, 山本2010], 加えて沖縄分類との対応は表1の通りである。また本文中の中国陶磁器の分類は大宰府分類[大宰府市教委2000], 森田勉白磁分類[森田1982], 上田秀夫青磁分類[上田1982], 小野正敏染付(青花)分類[小野1982]の分類名を利用する。

③……………喜界島・奄美大島と薩摩・大隅地方の遺跡の状況

(1) I期(大宰府・山本C期)

①喜界島・奄美大島

喜界町城久遺跡群は山田中西[喜界町教委2006・2008]・山田半田[喜界町教委2009]・小ハネ・前畑[喜界町教委2011]・大ウフ・半田[喜界町教委2013a]・半田口遺跡[喜界町教委2013b]・赤連遺跡からなる。掘立柱建物跡が合計で483基復元されている。建物の規模は梁行2または3間×桁行3または4間の建物と1×1間の建物が多い。2×3間の建物に比べ桁行4間以上の建物の規模はやや大きい分布が重なるものも多い(図4)。梁行1間・桁行1間の外側に四面庇を有する特徴的な建物があり(図3下), この他に梁行4間または3間の建物に四面・三面庇が付く建物があり, 山田半田遺跡41号掘立柱建物跡の規模が突出している(図3上)。土坑墓には焼骨再葬と呼ばれる墓制が採用されている[狭川2008]。この墓内からはカムイヤキ小壺, 白磁碗・皿, ガラス玉などが出土する(図5)。焼骨再葬墓の次の段階は同じ品を納める土坑墓が造られる[喜界町教委2015a]。そして土坑墓は建物群内に分布する(図2)。中国陶磁器は白磁の碗Ⅳ類を中心に392点出土し, 供膳具

表1 陶磁器分類対照表

| 本共同研究陶磁器調査時期区分 | | | 大宰府 | | 沖縄 | |
|----------------|---|-----------|--------|-----------|--------|-----------|
| | | | 山本2010 | | 瀬戸2015 | |
| 時期区分 | 陶磁器分類 | 年代 | 時期区分 | 年代 | 時期区分 | 年代 |
| I | 白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ 龍泉窯A0類(大宰府龍泉窯0類) | 11C後～12C中 | C | 11C後～12C前 | 1 | |
| II | 白磁Ⅶ・Ⅷ, 同安窯A・B 龍泉窯A1～6類(大宰府龍泉窯Ⅰ類) | 12C後～13C前 | D | 12C前～後 | 2 | |
| III | 龍泉窯B1類(大宰府龍泉窯Ⅱ類) | 13C後～14C前 | E | 13C初～前 | 3古 | 13C後 |
| | 龍泉窯B0類(大宰府龍泉窯Ⅲ類), 白磁Ⅸ, 今帰仁 | | F | 13C中～14C初 | 3新 | 14C前～中 |
| | 白磁碗枢府系・C(ピロースク)0・Ⅰ・Ⅱ | | G | 14C初～中 | | |
| IV a | 龍泉窯B2・C1・D1類, 白磁CⅢ | 14C後～15C初 | H | 16C後～15C中 | 4 | 1350～1420 |
| IV b | 龍泉窯B3・C2・D2・E1類, 内湾系皿 白磁皿B(森田D), 青花碗B | 15C前～中 | | | 5古 | 1420～1460 |
| V | 龍泉窯B4・E1類, 端反皿, 稜花皿 白磁碗C・皿C・E(森田E), 青花碗C・皿B1・C | 15C後～16C前 | I | 15C前～後 | 5新 | 1460～1480 |
| | | | J | 15C末～16C中 | 6 | 15C末～16C前 |
| VI | 龍泉窯C3・E2類, 白磁皿D(森田E) 青花碗E・F, 青花碗E・F・皿B2・E・F | 16C中～末 | K | 16C中～17C前 | 7 | 16C中～後 |



図 1 遺跡位置図

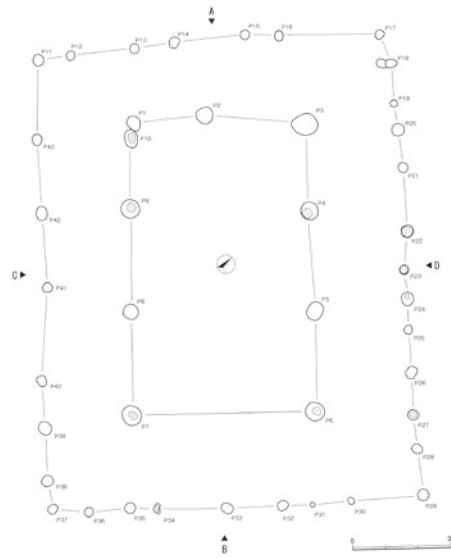
が主体で貯蔵具は少ない。初期高麗青磁の碗や朝鮮系無釉陶器が出土していることも特徴的である。調理具では日本産の大量の縦耳を有するタイプの滑石製石鍋と少量の滑石混入土器がある。貯蔵具は奄美地方で生産されたカムイヤキの A 群が主体となる〔新里 2004・2018〕。

奄美市笠利町下山田Ⅲ遺跡東地区〔笠利町教委 1988〕では掘立柱建物跡 9 棟、製鉄遺構が検出されており（図 6）、遺物は兼久式土器とカムイヤキ、滑石製品が出土しているが、白磁や青磁などの陶磁器は出土していない。掘立柱建物跡は主要な建物が 4×3 間が 1 棟、 4×2 間が 1 棟、 3×3 間が 2 棟、 3×2 間が 2 棟と倉庫とされる 1×1 間 3 棟がセットとなる。

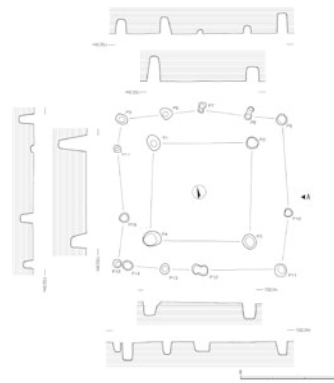
同じ奄美市笠利町の赤木名城跡〔笠利町教委 2003・奄美市教委 2008〕、万屋城跡〔笠利町教委 1997〕の出土遺物を見ると中国陶磁器供膳具の白磁碗Ⅳ類が出土しているが貯蔵具の陶器は出土していない。貯蔵具はカムイヤキ、調理具では滑石製石鍋が出土しており、この点は城久遺跡群と同様である。なお赤木名城跡は白磁碗Ⅳ類が出土していることを根拠にこの段階に九州の山城からの影響を受けて城郭が形成され沖縄のグスクへ影響を与えたとする意見〔笠利町教委 2003, 知念 2008〕があるが、薩摩・大隅地方では山城は 15 世紀に構造化したと考えられており〔上田 2014〕、出土遺物も 15～16 世紀が主体となるため 12 世紀に赤木名城跡の城郭関連遺構が構築されたとは考えられない。



図2 城久遺跡群山田半田遺跡の遺構配置図
[喜界町教育委員会 2009]



掘立柱建物跡 41 号



掘立柱建物跡 17 号

図3 掘立柱建物跡
[喜界町教育委員会 2009]

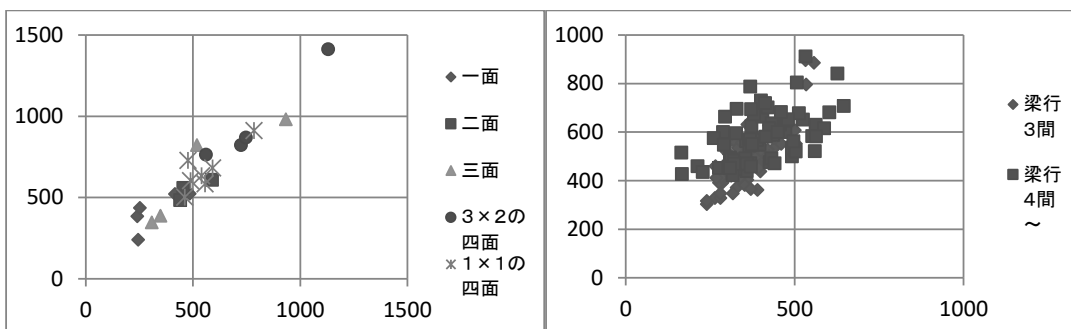


図4 掘立柱建物跡との規模の比較 (左：底付, 右：底無)

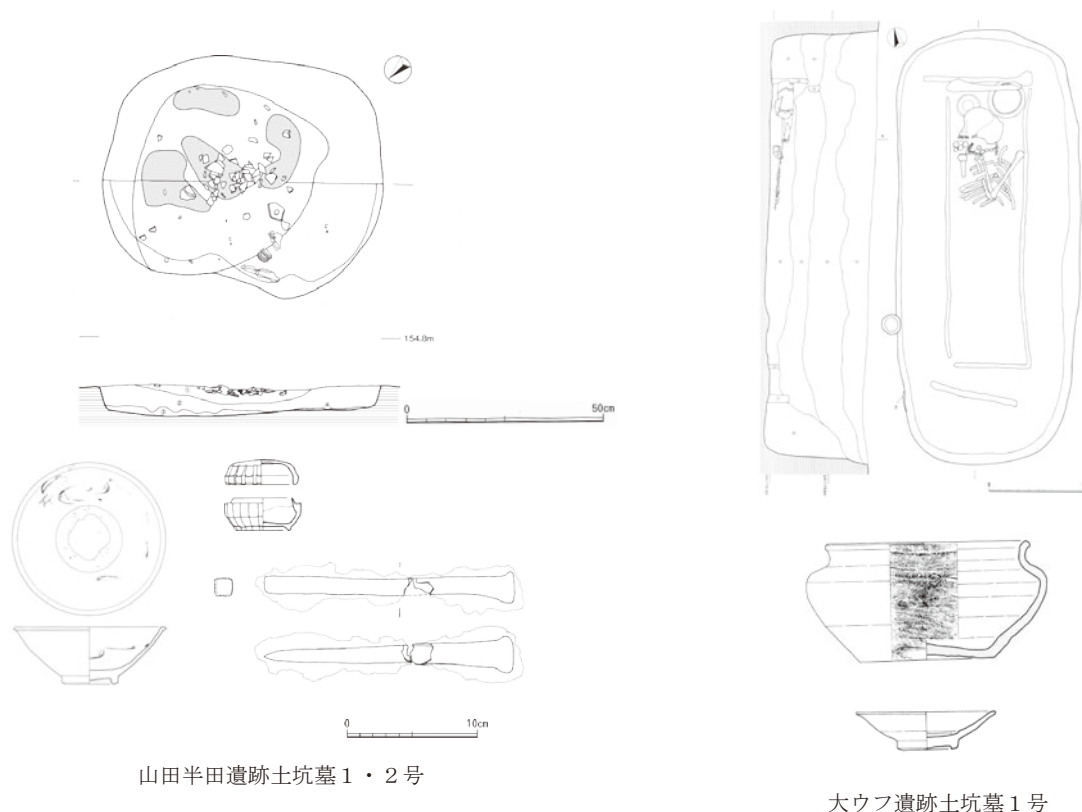


図5 城久遺跡群の土坑墓と出土遺物 [喜界町教育委員会 2009]

②薩摩・大隅地方

この段階の指標となる遺跡に大隅半島側の曾於郡天神段遺跡 [鹿児島県埋文調査セ 2015] がある。この遺跡では四面庇・三面庇の建物を中心とした掘立柱建物跡群がみられる (図7)。庇付建物跡を有する建物群は遺構の重複がほとんどなく、存続期間が短いと考えられる。掘立柱建物跡は庇付の建物以外は2×3間が主体で2×2間も見られる。建物跡群に加えて中国陶磁器が出土する土坑墓が組み合わさる (図8)。土坑墓からは白磁碗Ⅳ・Ⅴ類・刀子などが出土し、九州北部の屋敷墓と同じ特徴を有する [狭川 1993]。四面庇掘立柱建物跡と土坑墓のセットは薩摩川内市の上野城跡 [鹿児島県埋文セ 2004] でも見られる。

天神段遺跡の出土遺物は中国陶磁器が供膳具の白磁碗Ⅳ・Ⅴ類を中心⁽⁸⁾に貯蔵具の壺・水注が出土している。調理具は東播系須恵器と滑石製石鍋で構成される。なお、薩摩・大隅地方では城久遺跡群で特徴的な初期高麗青磁や朝鮮系無釉陶器は出土せず、調理具では滑石混入土器は作られず、縦耳を有するタイプの滑石製石鍋は出土量が少ない状況にある。なお三島村黒島ではカムイヤキ、高麗陶器、滑石が混入した土器が出土している。黒島は日宋貿易の輸出品であった硫黄が採れる硫黄島 [山内 2009・2014] の西に位置し、博多などで出土する中国系の瓦が出土している [三島村教委 2015]。

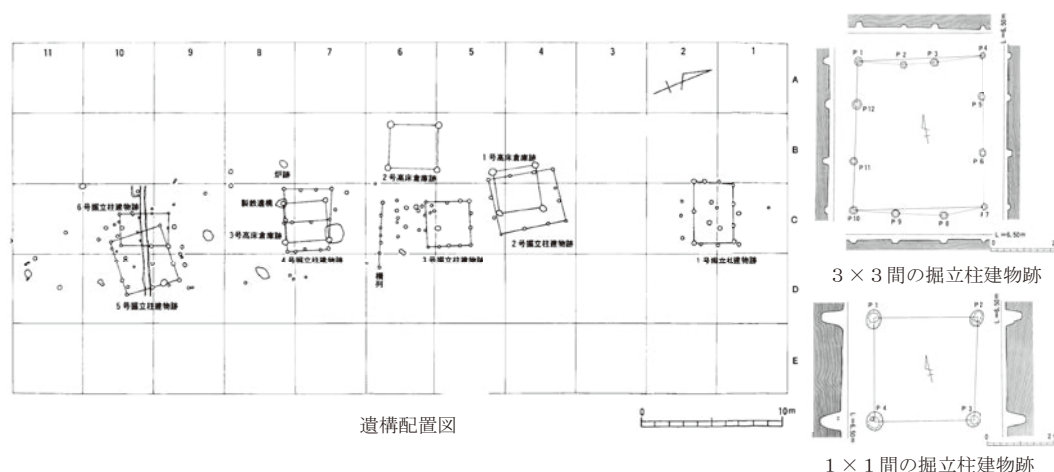


図6 下山田Ⅲ遺跡東地区の遺構配置図と掘立柱建物跡 [笠利町教育委員会 1988]

(2) II期(大宰府・山本D期)

①喜界島・奄美大島

城久遺跡群はこの段階に中国陶磁器が7点と激減する[喜界町教委 2015a]。遺構は前段階の状況を引き継いでいると考えられるが中国陶磁器の出土量の少なさを考慮すると集落自体が一度廃絶した可能性もある。奄美大島でも赤木名城跡・万屋城跡で中国陶磁器の出土量は数点である。奄美大島南部瀬戸内町の分布調査でも前段階に比べて表採地点数が減少している[瀬戸内町教委 2017]。対照的に宇検村焼内湾海底の水中遺跡である倉木崎海底遺跡では中国陶磁器が出土している[宇検村教委 1999, 宇検村誌編纂委 2017]。同安窯系青磁が210点, 龍泉窯系青磁碗皿Ⅰ類が1,173点と主体を占める。白磁は189点出土し, 白磁Ⅸ類は1点のみとなる。青白磁が189点, 中国陶器が731点(天目1点, 黄釉盤14点, 壺甕類674点), 土器3点が出土している。倉木崎海底遺跡での沈没船が残したとみられるこれらの中国陶磁器の出土からこれまで中国から博多への貿易ルートの他に中国南部から南西諸島を経由して九州へ向かう貿易ルートがあり, 出土した資料は貿易船の積み荷の可能性が指摘されている[金沢 1999]。

②薩摩・大隅地方

前段階の典型例で挙げた天神段遺跡はこの段階まで継続しており, 庇を有する掘立柱建物跡や屋敷・集落内に造られる土坑墓といった要素に変化はなかったと考えられる。天神段遺跡の土坑墓1号からは同安窯系青磁碗2点, 白磁皿5点, 青白磁小壺, 和鏡(松喰鶴鏡), 鉄製紡錘車・和鋏・土師器鍋などが出土している(図8)。天神段遺跡土坑墓1号は豊富な遺物を有しているが, 薩摩・大隅地方で特殊というわけではない。中国陶磁器に鏡などが組み合わさる例は薩摩・大隅地方で他にもあるためこれらの品は在地の有力者であれば墓に納められるものであった。天神段遺跡の出土遺物は中国陶磁器では同安窯系青磁, 龍泉窯系青磁Ⅰ類, 白磁碗Ⅶ類に転換する以外の遺物の構成に変化はない。

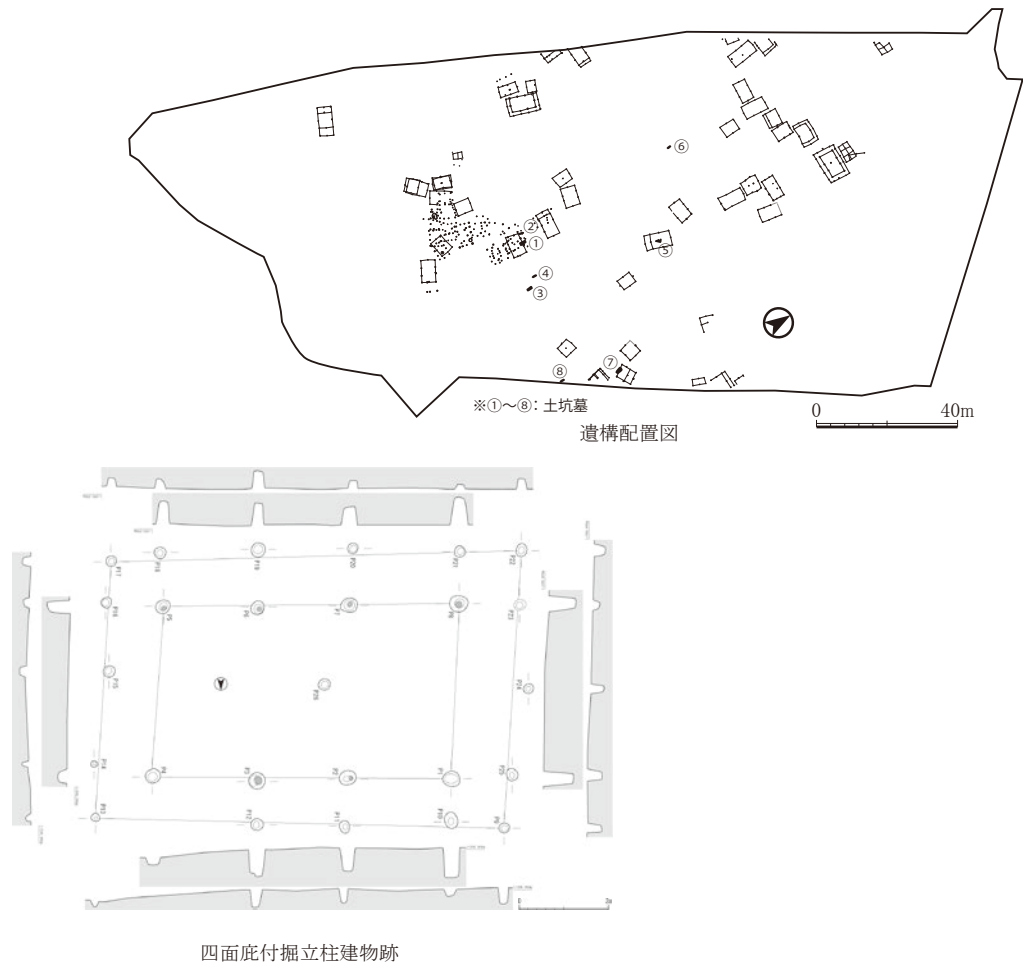


図7 天神段遺跡の遺構配置図・四面底付掘立柱建物跡と掘立柱建物跡の規模
[鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2015]

(3) Ⅲ期（大宰府・山本 E～G 期）

①喜界島・奄美大島

喜界島城久遺跡群の中で標高の低い大ウフ遺跡・半田遺跡では中国陶磁器（図9）やカムイヤキ B 群の出土が見られる [喜界町教委 2015a]。大ウフ遺跡は A～D の調査区があり，報告書未掲載遺物を含めた A 区・D 区の出土陶磁器の点数を比較したものが表2である。D 地区でも大宰府分類白磁碗Ⅳ・Ⅴ類などのⅠ期段階の遺物が出土している。しかしビロースクタイプⅡ類・今帰仁タイプや青磁碗 D1 類などのⅣ a 期以降の遺物は A～C 区より多い傾向にある。

掘立柱建物跡では 1×1 間の掘立柱建物跡の棟数が増加傾向にある。ただ 1×1 間の建物と桁行 3 間以上の建物とともに建物の規模は縮小傾向にある（図10）。

奄美大島では龍泉窯系青磁碗Ⅱ・Ⅲ類，白磁碗ビロースクタイプⅡ類が出土しているが，出土量は少ない。

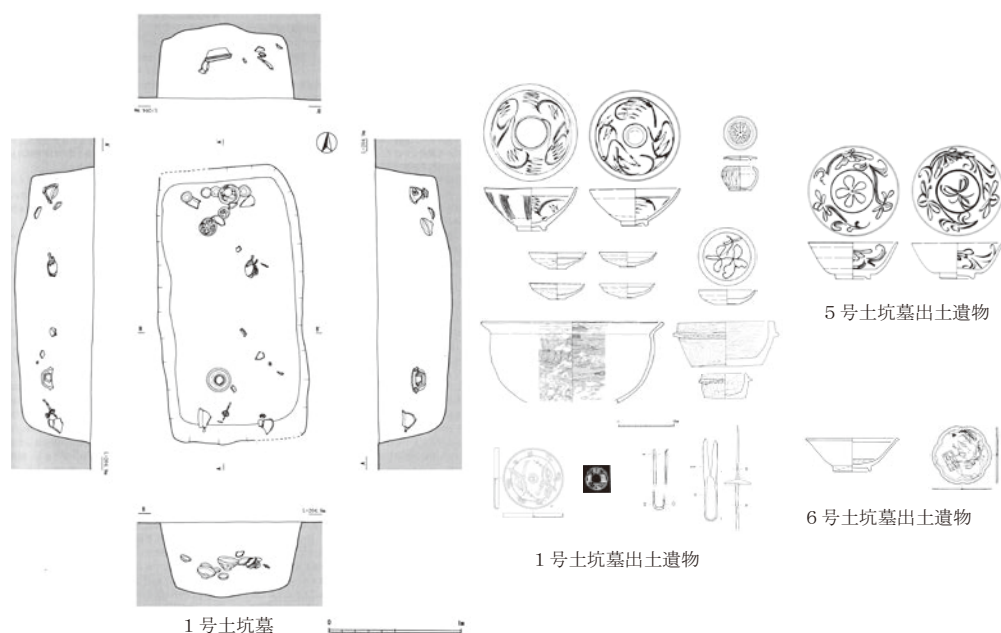


図8 天神段遺跡の土坑墓と出土遺物 [鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2015]

②薩摩・大隅地方

この段階の指標となる遺跡に始良市市頭C遺跡 [始良市教委 2013]・日置市山ノ脇遺跡 [鹿児島県埋文セ 2003] がある。市頭C遺跡はⅠ期から中国陶磁器が出土するがⅢ期から出土量が増加する。掘立柱建物跡は23棟復元されており (図11), 最も規模の大きな建物は2×4間の身舎に四面庇が付く。掘立柱建物跡以外に竪穴建物跡と土師器が納められた土坑墓も検出されている。竪穴建物跡は薩摩・大隅地方全体でみられ [堂込 1998], 土坑墓に納められる器は土師器に転換する。また墓では宝塔・五輪塔などの石塔⁽⁹⁾もみられる。中国陶磁器は供膳具の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類, 白磁Ⅸ類, 貯蔵具の陶器甕, 調理具の陶器鉢, 他に黄釉盤が出土している。国内産では調理具の東播系須恵器捏鉢に貯蔵具の常滑の甕が加わる。これらがこの段階の一般的な遺跡で出土する遺物の構成になり, 市頭C遺跡のように一部の遺跡では瀬戸や渥美などが出土する。

山ノ脇遺跡は龍泉窯系青磁, 白磁Ⅸ類などが出土している。掘立柱建物跡は10棟復元されている (図12)。市頭C遺跡に比べて桁行の間数が多く5間 (3棟) や7間 (1棟) と細長くなり, 身舎の柱間間隔の半分程度の間隔で庇が付く。掘立柱建物以外に竪穴建物跡1棟, 出土遺物は前述した中国陶磁器の他に調理具では東播系須恵器と滑石製石鍋が出土している。

なお, この段階の薩摩・大隅地方の遺跡からは白磁碗の今帰仁タイプ, ビロースクタイプ0・Ⅰ・Ⅱ類は出土していない。

(4) Ⅳa・Ⅳb期 (大宰府・山本H期)

①喜界島・奄美大島

喜界島では大ウフ遺跡も継続しているが, 手久津久遺跡群の中増遺跡 [喜界町教委 2015b] で遺物がⅣa期以降増加する (図9)。手久津久遺跡群は中増・崩り・川尻・川寺の各遺跡からなる。中増

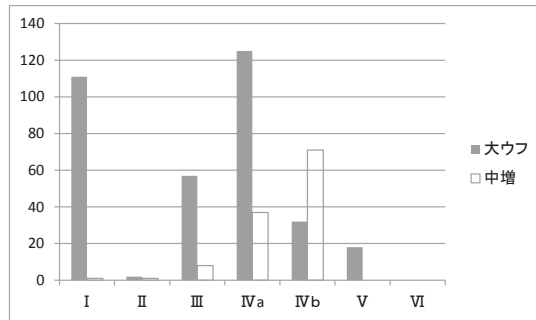


図9 大ウフ遺跡と中増遺跡の陶磁器出土量の変遷

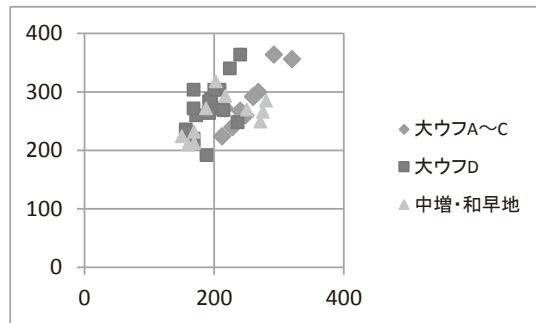
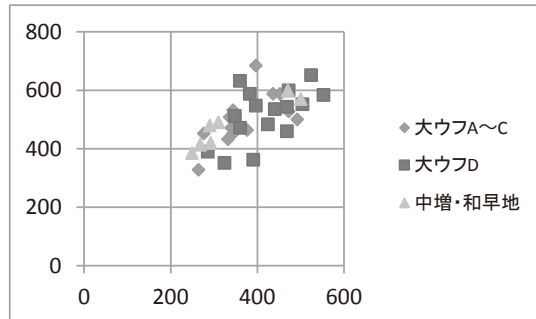


図10 大ウフ遺跡と中増遺跡の掘立柱建物跡の比較
(上：梁行3間以上・下：1×1間)

表2 大ウフ遺跡のA～C地点とD地点の出土陶磁器の比較

| 種類 | 器種 | 分類 | A～C地区 | D地区 |
|--------|----|--------------|-----------|-----|
| 白磁 | 碗 | Ⅱ類 (大宰府分類) | 1 | 2 |
| | | Ⅳ類 (大宰府分類) | 19 | 19 |
| | | Ⅴ類 (大宰府分類) | 7 | 8 |
| | | Ⅸ類 (大宰府分類) | 1 | |
| | | 今帰仁タイプ | | 1 |
| | | ビロースクⅡ | | 6 |
| | | ビロースクⅡ or Ⅲ | | 3 |
| | | ビロースクⅢ | | 13 |
| | | ビロースク不明 | | 1 |
| | 皿 | Ⅱ類 (大宰府分類) | 1 | |
| | | Ⅲ類 (大宰府分類) | 2 | |
| | | Ⅳ類 (大宰府分類) | 1 | |
| | | ⅣorⅤ類(大宰府分類) | | 2 |
| | | Ⅴ類 (大宰府分類) | 1 | |
| | | Ⅶ類 (大宰府分類) | | 1 |
| | | Ⅸ類 (大宰府分類) | | 4 |
| 同安窯系青磁 | 碗 | C1 | 1 | |
| | | B0(大宰府分類Ⅲ類) | | 4 |
| | | B1 (上田分類) | 1 | 17 |
| | | B2 (上田分類) | 3 | 4 |
| | | B3 (上田分類) | 2 | |
| | | B4 (上田分類) | 2 | 3 |
| | | C1 (上田分類) | | 3 |
| | | C2 (上田分類) | 1 | |
| | | D1 (上田分類) | 2 | 69 |
| | | D1 粗 | | 2 |
| | | D1orD2 | | 2 |
| | | D2 (上田分類) | | 4 |
| | | D2 粗 | | 1 |
| | | D2orE | | 1 |
| 龍泉窯系青磁 | 碗 | E1 (上田分類) | | 3 |
| | | 折縁皿 | 1 | 13 |
| | | 内彎皿 | | 3 |
| | | 端反皿 | 1 | 3 |
| | | 稜花皿 | 1 | 1 |
| | | 坏 | | 1 |
| | | 大皿 | | 1 |
| | | 盤 or 大皿 | | 1 |
| | | 盤 | 1 | 1 |
| | 皿 | 碗 | B (小野分類) | 1 |
| | | 皿 | B1 (小野分類) | 2 |
| | 陶器 | 天目茶碗 | | 7 |
| | | 褐釉四耳壺 | | 1 |
| | | 褐釉壺? | 4 | 6 |
| | | 壺? | 1 | 2 |
| | | 不明 | 1 | |

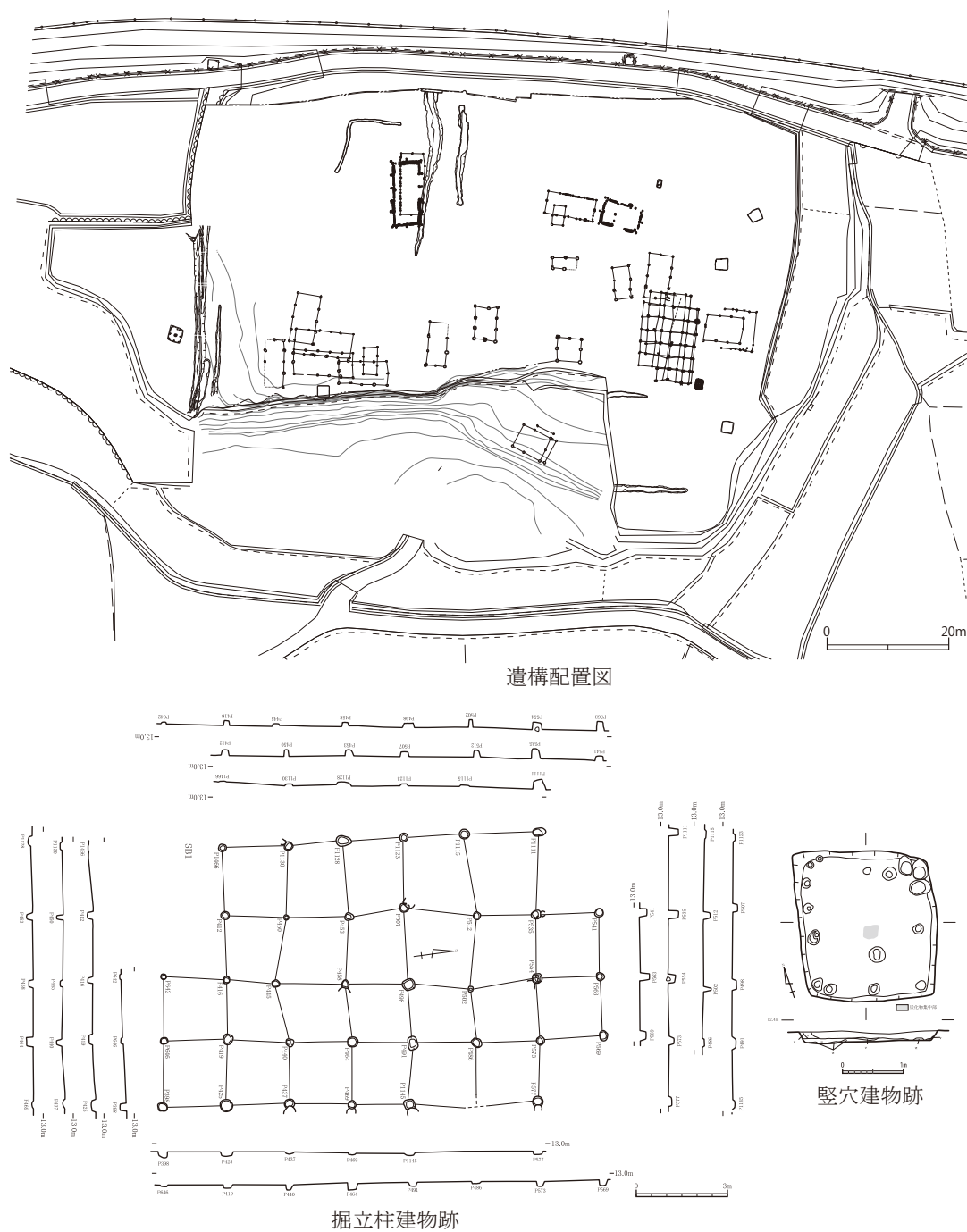


図 11 市頭 C 遺跡遺構配置図と掘立柱建物跡 [始良市教育委員会 2013]

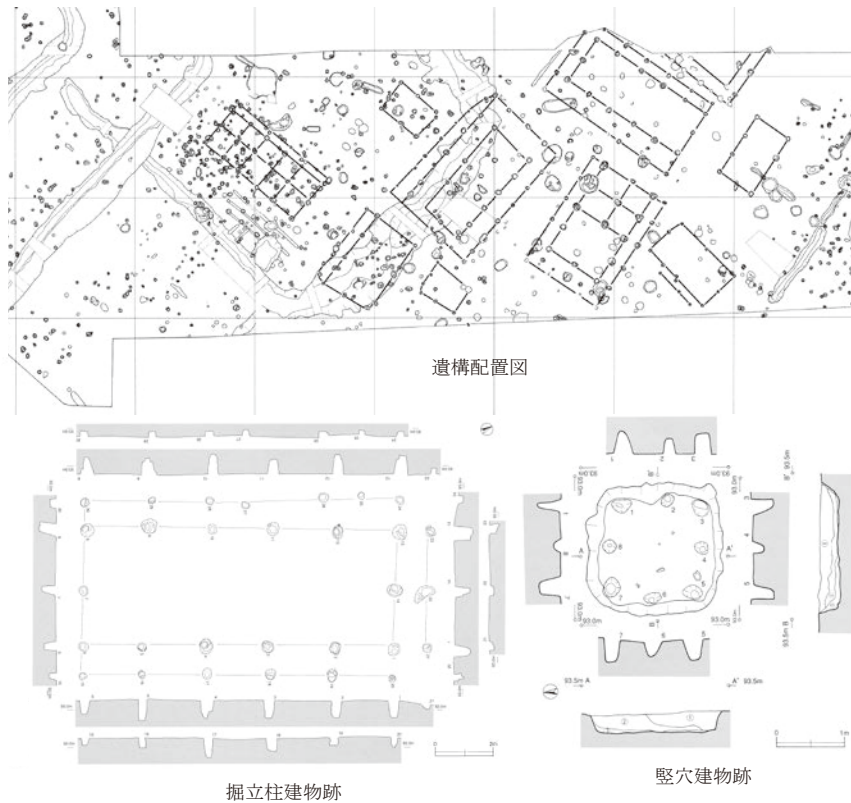


図 12 山ノ脇遺跡遺構配置図と掘立柱建物跡・竪穴建物跡 [鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003]

遺跡は調査区が A・B 地区に分かれ、A 地区では掘立柱建物跡 10 棟 (1 × 1 間が 7 棟)、土坑 9 基、焼土跡 9 基、溝状遺構 2 条、B 地区では掘立柱建物跡 5 棟 (1 × 1 間が 3 棟)、焼土跡 2 基が検出されている (図 13)。城久遺跡群の大ウフ・半田遺跡以外の遺跡に比べて出土遺物は青磁が主体となり、カムイヤキ・滑石製石鍋は減少している。また同じ喜界島の和早地遺跡 [鹿児島県埋文セ 2008] では多数の柱穴が検出され、掘立柱建物跡が 9 棟復元されている (図 14)。掘立柱建物跡は 3 × 2 間が 3 棟、4 × 2 間が 1 棟、1 × 1 間が 2 棟になる。他の 3 棟は 2 棟が調査区外に伸びており規模がわからず、1 棟 (7 号) は柱筋がかなりゆがんでいる。1 号と 2 号掘立柱建物跡は一部柱同士が溝でつながれている。出土遺物は青磁が多くを占めており、青磁碗 D1・D2・C1・C2 類や盤が出土している⁽¹⁰⁾。

奄美大島の赤木名城跡・万屋城跡は青磁碗 C2・D2 類を中心に出土しており、前段階に比べて出土量が増加している。万屋城跡⁽¹¹⁾ではサンゴや自然石を護岸のように敷いた池、柱穴、V 字溝、土坑墓が検出されている (図 15)。土坑墓は 8 体の人骨が 3 体・1 体・1 体・2 体の 4 基に分かれて埋葬されており、人骨以外に目立った遺物は出土していない。人骨のみが埋葬されて複数埋葬される事例は城久遺跡群でもあり (図 16)、喜界島の中で新しい段階の墓制と考えられている [喜界町教委 2015a]。

②薩摩・大隅地方

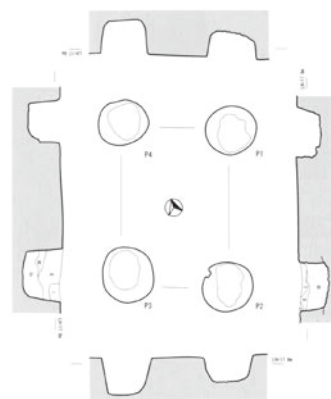
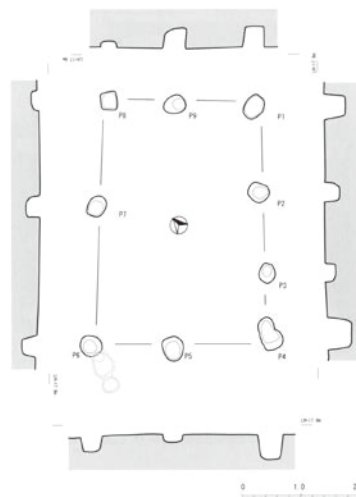
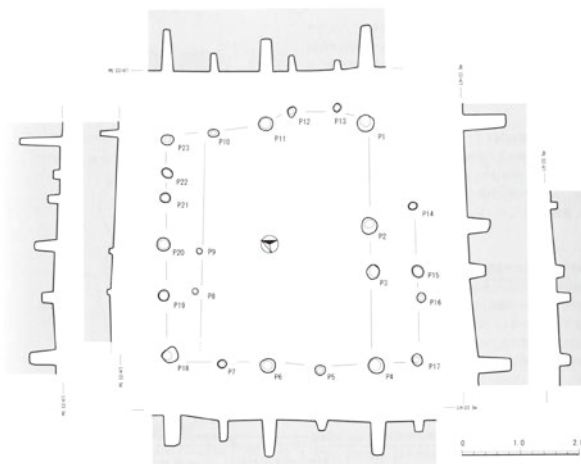
この段階以降の調査事例として最も多いのは山城になる。平地に位置する集落遺跡では前段階の指標として提示した市頭 C 遺跡、山ノ脇遺跡がこの段階まで継続する。山ノ脇遺跡では瓦質土器の



A地区遺構配置図



B地区遺構配置図



掘立柱建物跡

図13 中増遺跡遺構配置図と掘立柱建物跡 [喜界町教育委員会 2015b]

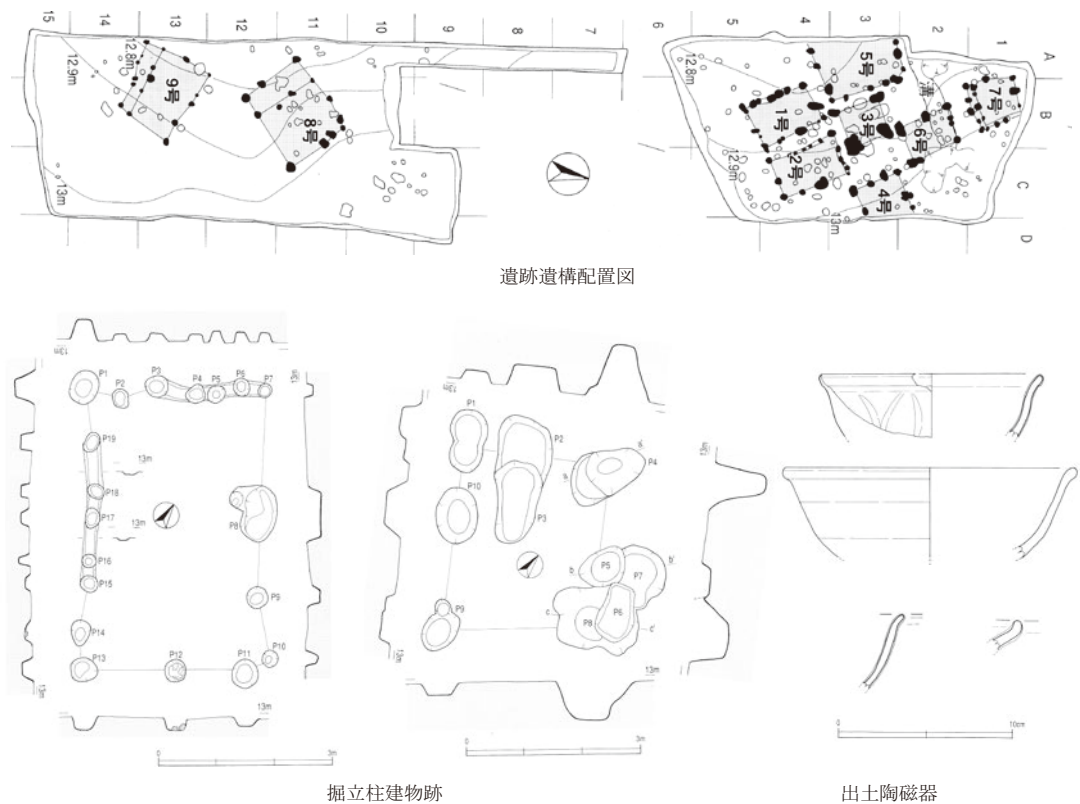


図 14 和早期遺跡遺構配置図と掘立柱建物跡 [鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008]

鉢、鉄製鋤先、青磁碗、古銭を埋納した土坑などが検出されている。遺物は青磁碗 B4・D1・D2、C2 類が出土しているが、C1 類は出土していない。国内産の製品では調理具が東播系須恵器から瓦質土器に転換する。

(5) V・VI期（大宰府・山本Ⅰ～Ⅱ期）

①喜界島・奄美大島

この段階になると前段階までにくらべて遺物出土量が大きく減少し、遺構の様相も不明になる。ただし資料を実見できていないが、奄美市名瀬の大熊集落遺跡群では青花の出土が報告されている [名瀬市教委 2004]。

②薩摩・大隅地方

山城の調査事例をみると南九州市知覧城跡 [知覧町教委 2006] では 2 × 3 間の身舎に 3 面庇があり、柱間間隔は均等になる (図 17)。さつま町虎居城跡では側柱建物跡で 3 × 4 間の建物が復元されている [鹿児島県埋文セ 2011]。中国陶磁器では主体は青花に移る。青花では景德鎮窯系と漳州窯系が出土する。調理具は備前の播鉢、貯蔵具は備前の壺・甕類、中国陶器耳壺、タイ産黒褐釉四耳壺が出土。これ以外に華南三彩・緑釉の水注・盤、青釉の小皿、ベトナム産焼締長胴壺なども出土する [重久 2004, 橋口 2011, 川口・中山 2012, 岩元 2014]。

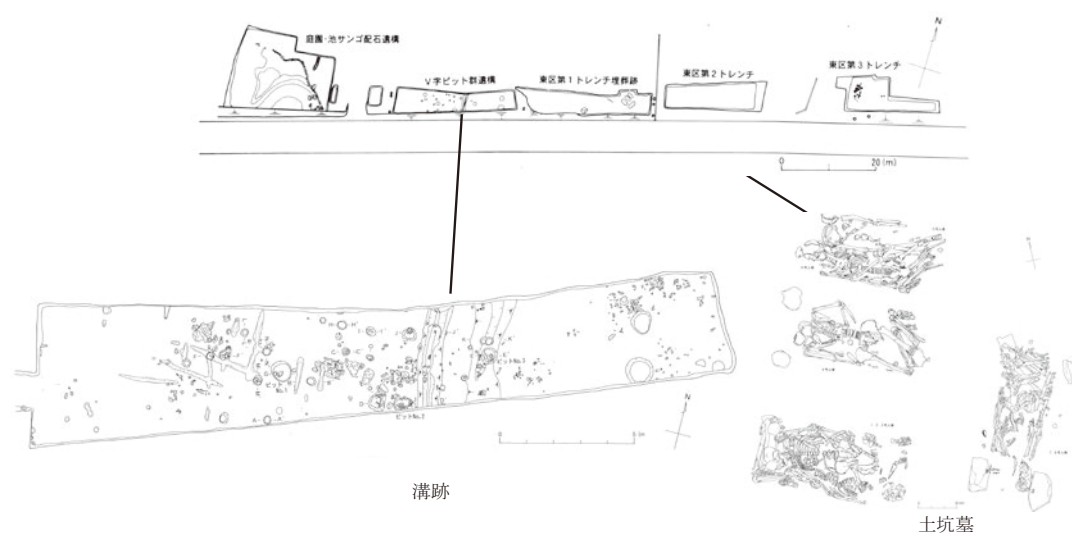


図15 万屋城跡遺構配置図 [笠利町教育委員会 2003]

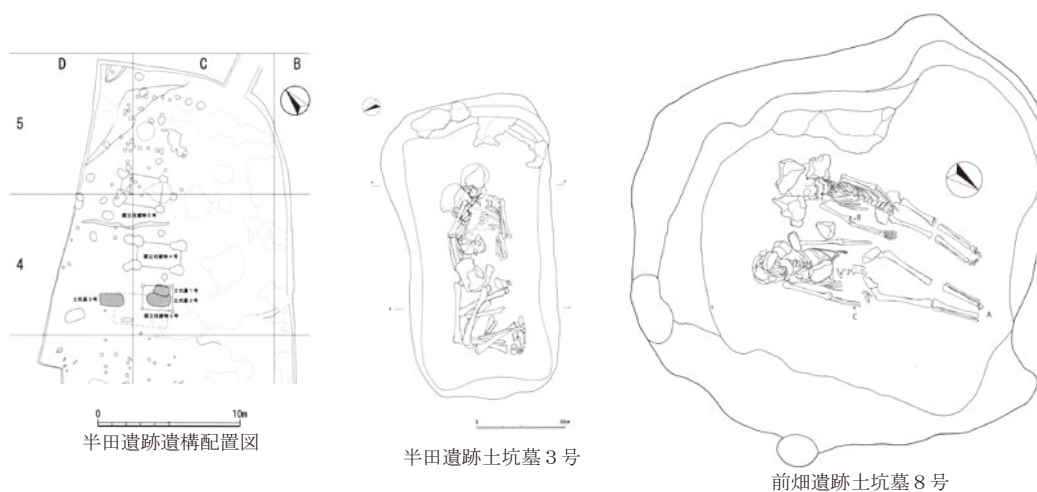


図16 半田遺跡遺構配置図・土坑墓，前畑遺跡土坑墓 [喜界町教育委員会 2013a]

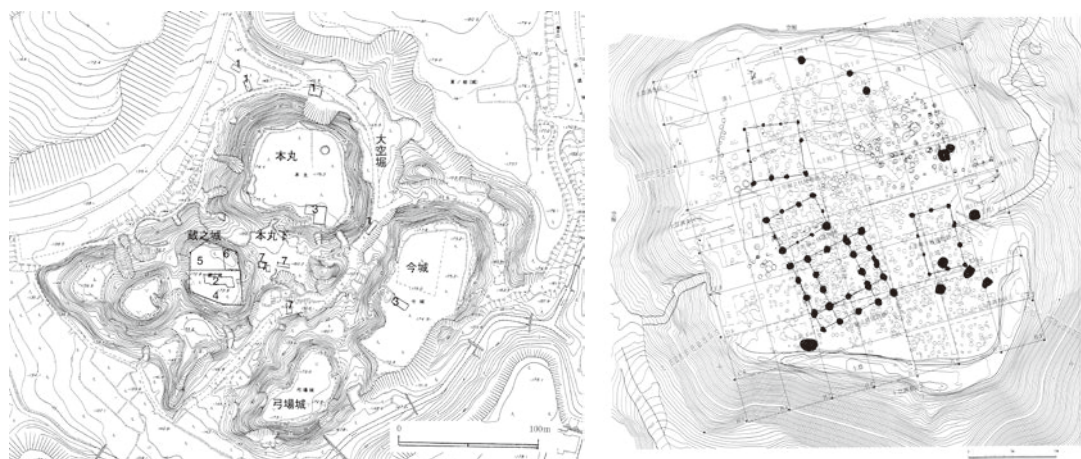


図17 知覧城跡地形図と遺構配置図 [知覧町教育委員会 2006]

④……………比較

(1) I 期（大宰府 C 期）

両地域に四面庇の掘立柱建物跡，建物跡周辺に存在する土坑墓といった共通する要素がみられる。11 世紀から 12 世紀にかけて文献史学からは薩摩・大隅の国司や阿多忠景のような領主層が南島との交易に関与しており，喜界島・城久遺跡群を交易拠点としたことが指摘されている〔鈴木 2008・田中 2008〕。このような南九州の勢力の南島交易の関与が建物や土坑墓の位置に一部現れているのではない。ただし遺構・遺物どちらも共通する点よりも 1×1 間の掘立柱建物跡，貯蔵・調理具でカムイヤキが卓越するなど異なる点もある。また喜界島・奄美大島では研究史で指摘されているように中国産白磁Ⅳ類，日本産の滑石製石鍋，奄美地方産カムイヤキが南西諸島でセットとなり，奄美大島・喜界島の各遺跡で出土している。なお滑石製石鍋だが，喜界島では縦耳を有するタイプが大量に出土しているが，薩摩・大隅地方では出土量が少ない状況にある。石鍋の流通には宋商人の存在が重要とされており〔鈴木 2007〕，前述の薩摩・大隅の国司・有力者と宋・日本の商人が関与し，I 期以前の城久遺跡群の公的な機関を中心とした南島交易体制が変化したとされている〔永山 2008〕。なお城久遺跡群の出土量に比べて奄美大島の赤木名城跡は白磁が少なく，カムイヤキが多数を占めている（図 19）。集落として常に利用されたのではなく聖地や墓地などとして利用された可能性も考慮する必要がある。

(2) II 期（大宰府 D 期）

薩摩・大隅地方では中国陶磁器の出土は多いが城久遺跡群では減少し，奄美大島でも陸上の遺跡で中国陶磁器はかなり少ない。倉木崎海底遺跡で貿易船（沈没船）の積み荷と考えられる中国陶磁器が大量に出土しており，中国から南西諸島を経由した九州への貿易ルートの存在が指摘されている〔金沢 1999〕。しかし陸上で薩摩・大隅地方に比べ出土量が大きく減少する奄美大島に貿易船が常に往来したとは考えにくい。この時期には貴海島に阿多忠景の平氏政権からの討伐命令による逃亡や源頼朝による征討などが起きており〔鈴木 2008・田中 2008・永山 2008〕，このような事件の影響でそれまで喜界島・奄美大島に関与した九州の勢力が活動を減少または停止したため，北・九州からの中国陶磁器の流通も減少したことが遺跡の状況に反映されているのではない。

(3) III 期（大宰府・山本 E～G 期）

薩摩・大隅地方は中国陶磁器が継続して出土する。遺構では竪穴建物跡が加わり，掘立柱建物跡では館の中心建物の桁行柱間数が増加する。喜界島・奄美大島ではこれらの遺構はなく遺構面においてこの段階から両地域の差異が大きくなる。中国陶磁器は喜界島・奄美大島は前段階に比べると回復する傾向にあるが薩摩・大隅地方に比べると出土量は少ない。ただ少ないながら喜界島・奄美大島では白磁碗今帰仁タイプ，ビロースクタイプ 2 類が出土しており，新里〔新里 2015〕らが指摘する南からの商品流通が看取される。薩摩・大隅地方ではこれらは出土していない。III 期は博多・北からの流通が主であり，白磁碗今帰仁タイプ・ビロースクタイプ 2 類が南・南西諸島から流通することはなかったとみられる。日本産の陶器類では東播系須恵器や常滑は薩摩・大隅地方までに流

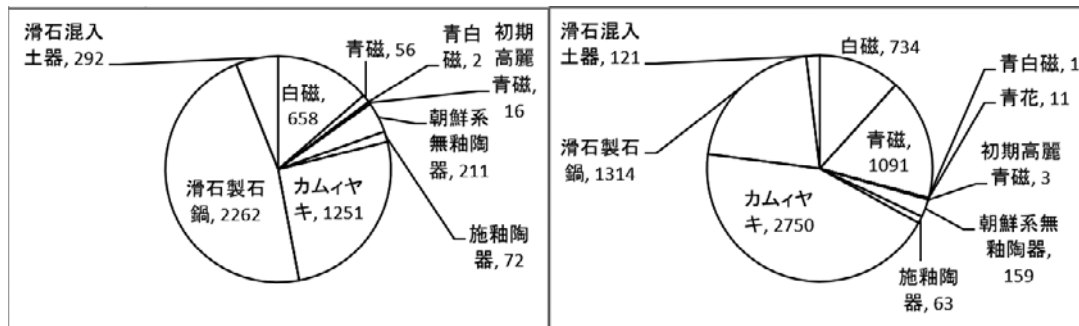


図18 山田中西・山田半田・小ハネ・前畑・半田口遺跡(左)と大ウフ・半田遺跡(右)の遺物組成
(喜界町教育委員会 2015a をもとに作成)

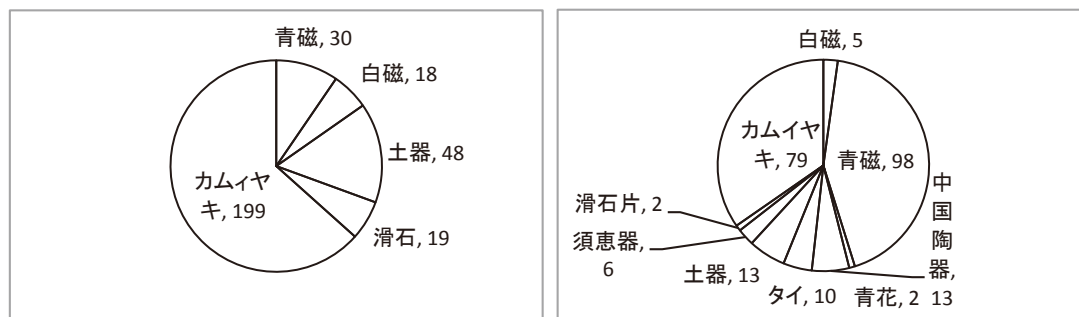


図19 赤木名城の遺物組成

図20 万屋城跡の遺物組成

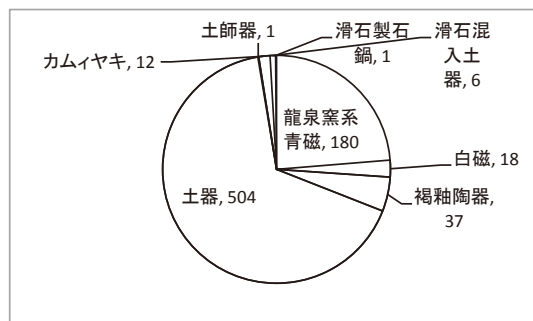


図21 中増遺跡の遺物組成
(喜界町教育委員会 2015b をもとに作成)

通が限られ喜界島・奄美大島には流通していない。なおカムイヤキは奄美地方以南で流通しているが主な分布は沖縄地方に移ることが指摘されている[新里2018]。

(4) IV a・IV b 期(大宰府・山本H期)

喜界島・奄美大島の遺跡では掘立柱建物跡は2×3間と1×1間が主で大ウフ遺跡A～C区・D区・中増遺跡と建物は縮小傾向にある。薩摩・大隅地方では平地の遺跡では2×3間が主で、中心建物は桁行方向が拡大する。中国陶磁器ではIV a期の青磁碗C1類が喜界島では出土するが薩摩・大隅地方ではみられず、白磁ピロースクタイプⅢ類は少ない。IV b期の青磁碗C2・D2類は両地域ともに一定量出土しており、この段階に南西諸島から薩摩・大隅地方への陶磁器の流通が安定的になったとみられる。日本産陶器・土器では薩摩・大隅地方では貯蔵具が備前や瓦質土器へと転換し、

中国やタイ産陶器の壺も出土する。喜界島・奄美大島ではカムイヤキの流通は終了するが日本産の陶器は流通せずに中国やタイ産の陶器類へと転換していく。この段階の遺物が主体となる中増遺跡では、城久遺跡群などと比べてカムイヤキの比率に大きな違いが出ている（図 18～21）。調理具は薩摩・大隅地方が備前と瓦質土器の播鉢に転換するが喜界島・奄美大島では鉢は出土せず、この違いは食文化の違いに由来するものかもしれないが今後検討が必要である。出土遺物量はともに増加するが遺構面の両地域の関連は薄いままである。

(5) V・VI期（大宰府・山本Ⅰ～Ⅱ期）

喜界島・奄美大島笠利地区では中国陶磁器がほとんど出土せず、遺跡が継続しておらず、集落が移動した可能性がある。薩摩・大隅地方ではこの時期に限定できる遺跡の調査事例はないが前段階と大きな違いはないと考えられる。中国陶磁器は青花が中心となり白磁 E 類、青磁 C3 類、華南三彩・緑釉も出土する。

まとめと課題

喜界島・奄美大島と薩摩・大隅地方ではⅠ期は四面庇掘立柱建物跡・建物群内にある土坑墓など「中世居居的な建物配置」[中島 2010] といえる共通する要素が少ないながらもある。文献史学では阿多忠景などの薩摩・大隅地方の在地領主層が南島と九州の交易に関与していたことが指摘されており[鈴木 2008・田中 2008]、遺跡の状況からも薩摩・大隅地方など九州からの人の移動がうかがえ、中国陶磁器も九州から流通したと考えられる。

Ⅱ期になると中国陶磁器の流通量が大幅に減少する。このころに南島交易に関与していた阿多忠景が追討され喜界島へ逃亡した事件や源頼朝の貴海島征討が起きている[永山 2008]。このような事件が影響してⅠ期に九州から奄美へ中国陶磁器をもたらした九州の在地領主・商人らが南島との交易に関与できなくなり、九州からもたらされていた中国陶磁器が減少し、遺構面でも共通点が少なくなったと考える。ただし今回検討を行っていない徳之島で生産されたカムイヤキ B 群には黄釉盤を模倣した鉢があり、鎌倉時代に薩摩国川辺郡の地頭で北条得宗家被官である千竈氏の所領の譲状には徳之島を含めた奄美地方の島名が記述されている[村井 1999]。黄釉盤は薩摩・大隅地方のⅢ期の遺跡では一般的に出土し、喜界島・奄美大島では出土していないため、カムイヤキの生産に千竈氏などの薩摩の領主層が関与していた可能性はあるが、その程度や方法については今後の検討課題である。

Ⅲ期からⅣ a 期にかけて福建産白磁碗や青磁碗 C1 類といった薩摩・大隅地方で出土例がない、もしくは少ない遺物が喜界島・奄美大島では出土している。喜界島・奄美大島ではⅠ期以来の北・九州からの流入ルートとは異なる南・琉球からの流入がこの時期にあり、薩摩・大隅地方では一段階遅れたⅣ b 期に琉球から中国陶磁器が流入したとみられる。しかし遺跡の中心建物や土坑墓は喜界島・奄美大島とは関連が少なく、薩摩・大隅地方の領主層が奄美地方に拠点を置くことはなかったと考えられる。

なおこの段階の青磁が出土している赤木名城跡（図 22）はこれまで中世日本戦国期の山城の影響を受けたと評価[鶴嶋 2008] されている。しかし喜界島・奄美大島の各遺跡の遺構・遺物とも薩摩・大隅地方と関連の少ない状況からはこの段階に在地勢力が薩摩・大隅地方や九州からの影響を受け

て城郭を構築した可能性は低い。奄美大島では旧名瀬市域で城郭関連遺構の分布調査が行われており、山の尾根に堀切・土塁・平坦地が連なる遺跡が確認されている（図23）。中世段階は赤木名城

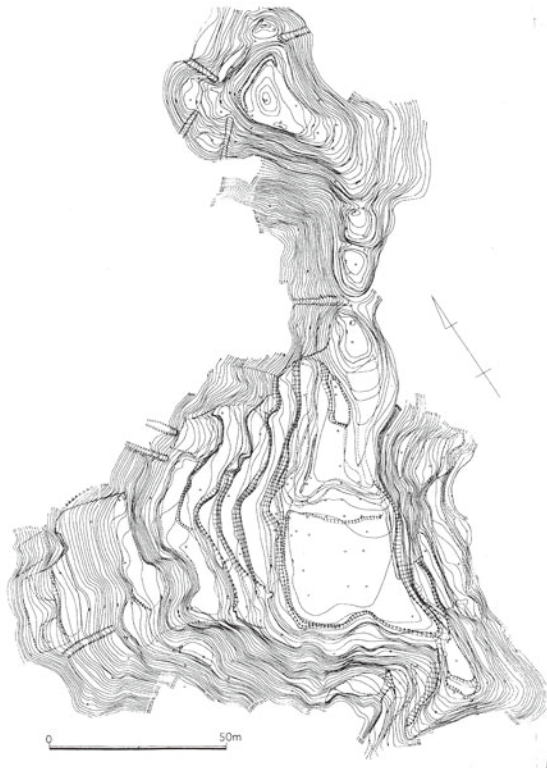


図22 赤木名城跡地形図
〔奄美市教育委員会 2015〕

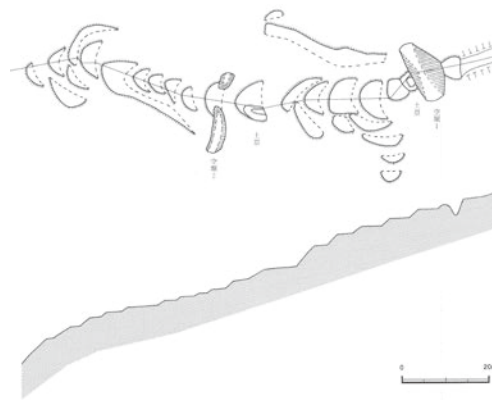


図23 名瀬勝ハーゲ
（赤貝）遺跡8遺構図
〔名瀬市教育委員会 2001〕

表3 喜界島・奄美大島と薩摩・大隅地方の各要素の比較

| 琉球帝国 | 大宰府 | 喜界奄美 | | | 薩摩・大隅地方 | | |
|------|------|------|---------|---------------|---------|---------|---|
| 時期区分 | 時期区分 | 中国陶磁 | 庇付掘立柱建物 | 墓 | 中国陶磁 | 庇付掘立柱建物 | 墓 |
| I | C | ◎ | ○ | 焼骨再葬墓 | ◎ | ○ | 土坑墓（陶磁器有） |
| II | D | △ | ? | 土坑墓 （陶磁器有） | ◎ | ○ | |
| III | E | △ | × | 土坑墓 （陶磁器無） | ◎ | ○ | 土坑墓（土師器有） 後半になると土坑墓（中国 銭）が中心に、火葬（石塔） もある |
| | F | △ | × | | ○ | ○ | |
| | G | △ | × | | △ | ○ | |
| IV a | H | ○ | × | | △ | ○ | |
| IV b | | ◎ | × | | ○ | ○ | |
| V | I | ○ | × | | ○ | ○ | |
| | J | × | × | | ○ | ○ | |
| VI | K | × | × | | ○ | ○ | |

※◎：多い，○：普通，△：少ない，×：無

も堀と土塁を組み合わせた簡単な構造だったのではないか。また赤木名城跡の出土遺物は中世よりも近世の陶磁器類が多い。そのため近世にさらに整備されて現状の形態になった可能性が高い⁽¹⁴⁾。

V・VI期は薩摩・大隅地方では中国陶磁器の出土は継続するが喜界島・奄美大島で減少している。IV b からV期は喜界島・奄美大島が琉球と対立して敗れ、支配下に入る時期に当たる。奄美大島の笠利地区の遺跡ではこの段階の遺物は減少しているが、名瀬地区では出土が報告されており、中国陶磁器は流通している。集落が存続していない要因として集落が移動した可能性も想定されるが、その消長に琉球の支配下に入った影響があったのかという点は今後の検討課題である。

謝辞

本稿は歴博基盤研究「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」の成果の一部であり、プロジェクトメンバーには多くの御教示をいただきました。また資料調査等において多くの方にお世話になりました。末筆ながらご芳名を記して感謝の意を表します。なお本稿は公益財団法人 高梨学術奨励基金平成 29 年度 若手研究助成の一部を利用し執筆した。

川口雅之 喜友名正弥 野崎拓司 松原信之 山本信夫 渡聡子

註

(1)——中島は廃棄土坑がみられない点について一過性の居住地と評価し、建物に官衙的配置を有しない点について中世期居館的な建物配置の可能性を指摘している [中島 2010]。

(2)——狭川・中島・瀬戸のいずれも中世日本の屋敷墓と同一という評価は行っていない。

(3)——城久遺跡群で検出された掘立柱建物跡のうち柱並びが左右対称で整然とした古代の建物が山田半田・半田口・大ウフ遺跡で確認されている [喜界町教委 2015s]。

(4)——城久遺跡群でみられる 1×1 間の身舎に四面庇が付く建物は特徴的な建物である。なお柱穴の数や柱間間隔に違いはあるが、南さつま市渡畑遺跡で検出された 3×3 間の総柱建物の周辺では寧波系中国瓦が出土しており、中国風の廟と想定されている [橋口 2014]。

(5)——石鍋を模倣した鍋形土器が少量みられ、山田半田遺跡では滑石を混和剤として用いた土師器甕が少量出土している [新里 2010]。

(6)——赤木名城跡の築城年代は 2003 年刊行の発掘調査報告書では白磁Ⅳ類の出土から 12 世紀とされたが [笠利町教委 2003]、15 世紀の青磁も出土していた。2015 年の保存管理計画書では中世城郭として構造化したのは 14 世紀後半～15 世紀頃とされた [奄美市 2015]。しかし城久遺跡群の総括報告書での甲元眞之の論考 [甲元

2015] や宇検村誌 [宇検村誌編纂委員会 2017] では当初の 12 世紀に築城されたという評価が引用されている。

(7)——さつま町虎居城跡は 12 世紀に領主の大前氏により築城されたと郷土史などに記載があるが出土遺物は 15・16 世紀が中心である。その他にも 12 世紀に築城とされる山城があるが出土遺物は 15・16 世紀が中心である。

(8)——薩摩・大隅地方の陶磁器の様相・構成については橋口亘により、用途ごとの大まかな状況が示されている [橋口 2002・2003]。

(9)——大隅諸島から喜界島・奄美大島までの間で中世の石塔で最も南で確認されているのはトカラ列島悪石島の 15 世紀代のものになる [橋口・松田 2014]。

(10)——和早地遺跡では土製煮沸具が報告されており、この段階に土製煮沸具は衰退している可能性が指摘されている [新里 2010]。

(11)——万屋城跡など奄美市笠利町の中世遺跡はグスクとして紹介されているが [奄美市 2008]、沖縄のグスクと同じ構造の遺跡はない。奄美地方では日本の館や屋敷に当たる遺跡をグスクと呼称していることが三木靖により指摘されている [三木 1999]。

(12)——カムイヤキ小壺完形品の出土については瀬戸内町では現在出土地が不明なものを含めて 9 点のカムイ

ヤキ小壺の完形品の出土があり、埋葬・埋納によるものと指摘されている。また出土地点が確認できる2地点のうち1地点は遺跡の範囲外、もう1地点は集落内のカミミチと呼ばれる道で人骨とともに出土している[鼎 2005]。
(13)——貴海島は、喜界島を指し示すものではなく、

南九州から奄美地方にかけての広い海域を示すと考えられている[永山 2008]。

(14)——薩摩大隅の中世山城では近世遺物が出土し近世になっても山城が維持されていたことが指摘されている[堂込 2003]。

引用・参考文献

- 新垣力・瀬戸哲也 2005 「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理」『沖縄埋文研究』No.3 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 池畑耕一 2008 「喜界島の古代・中世遺跡」『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』高志書院
- 池田榮史編 2008 『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』高志書院
- 2009 『中世東アジアの周縁世界』同成社
- 岩元康成 2014 「中世後半から近世初頭の南九州における東南アジア陶磁器と華南三彩」『新田栄治先生退職記念論文集』Archaeology from the South 2 新田栄治先生退職記念事業会
- 石上英一 2015 「史跡赤木名城跡をめぐる歴史的外観」『史跡赤木名城跡保存管理計画書』奄美市教育委員会
- 上田耕 2014 「南九州の城郭—群郭式の曲輪配置と近世麓集落の連続性—」『中世城館の考古学』高志書院
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 宇検村教育委員会 1999 『倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村文化財調査報告書第2集
- 宇検村誌編纂委員会 2017 『宇検村誌 自然・通史編』
- 沖縄県立博物館 1985 『特別展グスク—グスクが語る古代琉球の歴史と文化—』
- 小野正敏 1982 「14～16世紀の染付碗皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 鼎丈太郎 2005 「瀬戸内町における遺跡の立地について」『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』瀬戸内町文化財調査報告書第1集
- 金沢陽 1999 「倉木崎「沈船」考」『倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村文化財調査報告書第2集
- 亀井明德 1993 「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』第11号
- 川口洋平・中山圭 2012 「九州西岸における東南アジア陶磁と華南三彩」『貿易陶磁研究』第32号 日本貿易陶磁研究会
- 具志堅亮 2014 「奄美諸島出土の貿易陶磁」『貿易陶磁研究会沖縄大会資料』日本貿易陶磁研究会
- 甲元真之 2015 「考古学からみえる城久遺跡群」『城久遺跡群—総括報告書—』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(14) 喜界町教育委員会
- 狭川真一 1993 「墳墓にみる供献形態の変遷とその背景—北部九州を中心として—」『貿易陶磁研究』No.13 日本貿易陶磁研究会
- 2008 「城久遺跡群の中世墓」『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』高志書院
- 重久淳一 2004 「鹿児島県内から出土したタイ、ベトナム陶磁」『陶磁器が語る交流—九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器—』東南アジア考古学会
- 新里亮人 2014 「カムイヤキの生産と琉球列島の海域事情」『南からみる中世の世界—海に結ばれた琉球列島と南九州—』鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 2015 「琉球列島における中国陶磁器—11世紀～14世紀を中心に—」『貿易陶磁研究』No.35 日本貿易陶磁研究会
- 2018 『琉球国成立前夜の考古学』同成社
- 新里貴之 2010 「南西諸島の様相からみた喜界島」『古代末期・日本の境界 城久遺跡群と石江遺跡群』森話社
- 鈴木靖民 2008 「喜界島城久遺跡群と古代南島社会」『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』高志書院
- 鈴木康之 2008 「滑石製石鍋の流通と琉球列島」『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』高志書院
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007 「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究』5 沖縄県埋蔵文化財センター
- 瀬戸哲也 2009 「沖縄—グスク時代の墓葬制」『日本の中世墓』高志書院
- 2011 「南西諸島における様相」『考古資料から描く葬送作法』中世葬送墓制研究会

-
- 2013 「沖縄における 14・15 世紀中国陶磁編年の再検討」『中近世土器の基礎研究』25 日本中世土器研究会
- 2015 「14・15 世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』No.35 日本貿易陶磁研究会
- 2018 「沖縄本島におけるグスク時代の階層化」『考古学研究』65-3 考古学研究会
- 高梨修 1997 「奄美におけるグスク研究のパスpekティブ」『南日本文化』30 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所
- 2010 「列島南縁におえる境界領域の諸相—古代・中世の奄美諸島をめぐる考古学的成果」『古代末期・日本の境界城久遺跡群と石江遺跡群』森話社
- 2011 「『キカイガシマ』海域の考古学—「境界領域」としての奄美群島」『琉球から見た世界史』山川出版社
- 2014 「琉球史の南北—喜界島城久遺跡群から見た琉球—」『琉球交叉する歴史と文化』勉誠出版
- 2015 「中世奄美の城郭遺跡」『琉球史を問い直す—古琉球時代論』叢書・文化の越境 23 森話社
- 太宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊 X V 陶磁器分類編」大宰府の文化財第 29 集
- 田中克子 2009 「ビロースクタイプに関わる窯跡とその製品—福建省 江流域窯跡の調査と関連資料の調査」『13～14 世紀の琉球と福建』熊本大学文学部
- 田中史生 2008 「古代の奄美・沖縄諸島と国際社会」『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』高志書院
- 知念勇 2008 「琉球から見る赤木名城」『赤木名城』奄美市教育委員会
- 鶴嶋俊彦 2008 「赤木名城の構造」『赤木名城』奄美市教育委員会
- 堂込秀人 1998 「中世南九州の堅穴建物跡」『南九州城郭研究』創刊号 南九州城郭談話会
- 堂込秀人 2003 「中世山城の近世遺物」『研究紀要縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 中島恒次郎 2008 「大宰府と南島社会」『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』高志書院
- 2010 「城久遺跡群の日本古代中世における社会的位置—津軽石江遺跡群との相違を含めて—」『古代末期・日本の境界—城久遺跡群と石江遺跡群—』森話社
- 仲宗根求 2004 「グスク時代開始期の掘立柱建物についての一考察」『グスク文化を考える 世界遺産国際シンポジウム〈東アジアの城郭遺跡を比較して〉の記録』新人物往来社
- 中山清美 1985 「奄美の城」『特別展グスク—グスクが語る古代琉球の歴史と文化』沖縄県立博物館
- 2014 「奄美大島・赤木名城跡とその文化的景観」『南からみる中世の世界—海に結ばれた琉球列島と南九州—』鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 永山修一 1997 「古代・中世における薩摩・南島間の交流—一夜久貝の道と十二島」『境界の日本史』山川出版社
- 2008 「文献から見たキカイガシマ」『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』高志書院
- 野口実 2017 「列島を翔ける平安武士 九州・京都・東国」歴史文化ライブラリ 446 吉川弘文館
- 橋口亘 2002 「鹿児島県地域における 16 世紀～19 世紀の陶磁器の出土様相」『鹿児島地域史研究』No.1 『鹿児島地域史研究』刊行会
- 橋口亘 2003 「中世薩摩における流通—出土陶磁器からみたその傾向—」『シンポジウム「流通・交通の中世考古学」—行き交うモノとヒトをさぐる—』発表資料集
- 橋口亘 2011 「南九州出土の東南アジア産陶器についての一考察」『陶磁器流通と西海地域』周縁の文化交渉学シリーズ 4
- 橋口亘 2014 「薩摩南部の中世考古資料をめぐる諸問題—薩摩塔・宋風獅子・貿易陶磁・清水磨崖仏群・硫黄交易—」『鹿児島考古』44 号 鹿児島県考古学会
- 橋口亘・松田朝由 2014 「トカラ悪石島に残る 15 世紀の山川石製宝篋印塔—中世日本における石塔造立文化圏の南縁—」『海洋回廊—海の道“薩摩”—』輝津館企画展図録論集 南さつま市坊津歴史資料センター輝津館
- 橋口亘・若松重弘 2014 「薩摩硫黄島採集の貿易陶磁—硫黄産地への中国陶磁の流入と硫黄交易—」『海洋回廊—海の道“薩摩”—』輝津館企画展図録論集 南さつま市坊津歴史資料センター輝津館
- 三木靖 1993 「奄美におけるグスク調査の報告」『奄美学術調査記念論文集』南日本文化研究所叢書 18
- 1999 「奄美の中世城郭について」『南九州城郭研究』創刊号 南九州城郭談話会
- 村井章介 1997 「中世国家の境界と琉球・蝦夷」『境界の日本史』山川出版社
- 2008 「中世日本と古琉球のはざま」『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』高志書院
- 2011 「古琉球をめぐる冊封関係と海域交流」『琉球から見た世界史』山川出版社
- 森田勉 1982 「14～16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 山内晋次 2009 「日宋貿易と「硫黄の道」」日本史リブレット 75 山川出版社
- 2014 「薩摩・琉球と「硫黄の道」」『南からみる中世の世界—海に結ばれた琉球列島と南九州—』鹿児島県歴史資料
-

料センター黎明館

山本信夫 2000 『大宰府条坊XV 陶磁器分類編』大宰府の文化財第29集 太宰府市教育委員会

2010 「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究』No.30 日本貿易陶磁研究会

引用参考報告書

始良市教育委員会 2013 『市頭A・B・C遺跡』始良市埋蔵文化財報告書(4)

奄美市教育委員会 2008 『赤木名城跡』

2015 『史跡赤木名城跡保存管理計画書』

2016 『赤木名地区文化的景観調査報告書』

伊仙町教育委員会 2005 『カムイヤキ古窯群Ⅳ』仙町埋蔵文化財発掘調査報告書12

鹿児島県教育委員会 1987 『鹿児島県の中世城館跡』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 『山ノ脇 石坂 西原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(58)

2004 『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(68)

2008 『荒木貝塚 和早地遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(119)

2011 『虎居城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(162)

笠利町教育委員会 1986 『城遺跡, 下山田遺跡, ケジⅢ遺跡』笠利町文化財調査報告書8

1988 『下山田Ⅲ遺跡(東地区)』笠利町文化財調査報告書9

1993 『用安湊城(ニヤトグスク)』笠利町文化財調査報告書19

1997 『笠利町万屋城』笠利町文化財調査報告書24

2003 『赤木名グスク遺跡』笠利町文化財調査報告書27

喜界町教育委員会 1996 『提り遺跡 後田遺跡 水口遺跡 竿ク遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

2006 『城久遺跡群 山田中西遺跡Ⅰ』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

2008 『城久遺跡群 山田中西遺跡Ⅱ』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

2009 『城久遺跡群 山田半田遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)

2011 『城久遺跡群 前畑遺跡・小ハネ遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

2013a 『城久遺跡群 大ウフ遺跡・半田遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)

2013b 『城久遺跡群 半田口遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)

2015a 『城久遺跡群 総括報告書』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(14)

2015b 『中増遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(15)

(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2015 『天神段遺跡』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(3)

瀬戸内町教育委員会 2017 『瀬戸内町の遺跡1 一貝塚時代～近世 分布調査偏一』瀬戸内町文化財調査報告書第5集

知覧町教育委員会 2006 『知覧城跡』知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書第12集

名瀬市教育委員会 2001 『奄美大島名瀬市グスク詳細分布調査報告書』

2004 『大熊集落遺跡群』名瀬市文化財叢書5

三島村教育委員会 2015 『黒島平家城遺跡 大里遺跡ほか』三島村埋蔵文化財調査報告書第1集

(始良市教育委員会)

(2020年7月9日受付, 2020年10月16日審査終了)

The Aspects of Medieval Remains in Kikaijima Island, Amami-Ōshima Island, and Satsuma-Ōsumi Area

IWAMOTO Yasunari

This paper compares the medieval remains of Kikaijima island, Amami- Ōshima island, and Satsuma-Ōsumi area through an analysis of the remains of buildings and pit graves excavated in these regions, as well as relics, such as Chinese ceramic wares. We examine the interrelationship of these excavated items by classifying the time period stretching from the latter half of the 11th century up until the 16th century into five stages.

Many of the archaeological discoveries dating back to the abovementioned period were not seen in medieval Japan, such as the bone-burning reburial graves observed in Kikaijima Gusuku sites. However, discoveries similar to Satsuma-Ōsumi area, including pit graves around dug-standing pillar building with eaves on the four sides were also identified. As shown by these remains in Kikaijima island and indicated in existing historical documents, local lords and Sung merchants of Kyushu were conducting trade in the Southern Islands.

However, there were fewer Chinese ceramic wares from the latter half of the 12th century excavated from the remains of Kikaijima and Amami- Ōshima Islands. This period witnessed events affecting trade with the Southern Islands, including the punitive expedition of Ata Tadakage of the Taira Clan and the conquest of Southern island by Minamoto no Yoritomo. Therefore, it can be assumed that these events affected the distribution of Chinese ceramic wares.

Among the excavated remains and relics, significant differences were noticed in objects dating from the 13th to the 15th centuries. Although scholars have observed that the Akagina Castle site in Amami- Ōshima island is similar to the Mountain forts of the Kyushu Sengoku period, it is unlikely that Kyushu castle construction techniques had been transmitted in the 15th century, and they may have developed in the early modern period.

In the 15th century, Kikaijima and Amami- Ōshima Islands were defeated in a war with the Ryukyu Kingdom. The 15th century ruins of Kikaijima island and Amami- Ōshima Kasari District have not survived, and very few relics from the 16th century have been excavated. It can be assumed that these settlements relocated. However, the question of how this relates to the dominance of the Ryukyu Kingdom needs to be examined in future research.

Key words: Kikaijima and Amami Oshima, building ruins, Chinese ceramic wares, pit graves
